

# 電気のふるさと

電源地域ニュース

● 特集 Pick Up!

自治意識の高まりで地域力がアップする

## 住民と行政の「協働」でいきいき住みよいまちづくり

広島県 安芸高田市



2 人  
 活力ある少数社会をいかに育むか  
 —共同から協働へ—  
 宮口 侗 勉

3 Pick Up !  
 住民と行政の「協働」で  
 いきいき住みよいまちづくり  
 広島県 安芸高田市

8 ふるさと応援団  
 竹田研究所  
 大分県 竹田市

10 いきいき電源地域  
 大間超マングロ祭り  
 青森県 大間町

おながわ秋刀魚収穫祭  
 宮城県 女川町

12 センター掲示板  
 ・「原子力発電所見学会」を実施しました  
 ・「エネルギープラザ2007」を開催しました  
 ・「エネルギー人形劇」を上演しました  
 ・「でんきのふるさと 新潟げんきフェスタ  
 in ごはんミュージアム」を開催しました  
 ・Vol.8・9 読者の声から  
 ・人事往来  
 ・読者プレゼント  
 ・お知らせ

16 電気のふるさとと産品自慢  
 かんもち紙風船  
 富山県 立山町

今号の表紙

島根原子力発電所(中国電力)  
 総出力:128万kW  
 運転開始:昭和49年3月(1号機)  
 :平成元年2月(2号機)



## 活力ある少数社会をいかに育むか —共同から協働へ—

早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授  
 宮口 侗 勉

**電** 源地域の大半は山間にあり、多くは過疎地域に指定されている。過疎地域の活性化のための国の支援は、一九七〇年に初めて過疎地域を支援する法律ができて以来続けられているが、一段と進む少子高齢化の中で、きびしい状況が続いていることに変わりはない。

筆者は、平野部にある県庁所在地を中心とする都市化が進む中で人口減少が続いた山間地域を、劣った地域と考えることは間違いだと、何度も指摘してきた。これらの地域は、水源地として水を平野部に供給し、かつてはわが国の電気エネルギーの多くをも都市に供給する役割を果たしてきた。むしろ過疎問題の本質は、そこにある地域社会が数によるパワーを失う過程で、少数による活力ある地域社会のしくみを創造することができなかったことにこそあり、筆者は早くから主張してきた。

人口が減る社会では、数が増えることによって活力が増大する都市とは違った原理で社会をつくり直して行かなければ、活力は失われ、多くのことが行き詰る。

てしまう。しかし過疎地域の多くは、どちらかという都市のようになろうとすることに熱心であった。かつてのわが国の地域社会は、よく似たタイプの人や世帯の塊であった。そしてそこには多くの共同作業があった。農作業やお祭り、さらには道普請などに、文字通り共に同じ人たちが力を結集し、そこにはそれなりのパワーがあった。対して今、過疎地域の地域社会はそのようなパワーを失ってしまっている。しかし昔に比べると、数は減ったものの、今は逆にさまざまな違ったパワーを持つ人が混住していることが重要である。

筆者は、同じタイプの人が力を結集した昔の共同作業に対して、少数でも違った力を組み合わせて飛躍的な力にすることを、今流の協働と考えたい。リタイアのUターン者、若いUターン者、元気な女性などの参加のもと、できる行政職員が要となつてさまざまなテーマのプロジェクトを動かしていくことこそが、活力ある少数社会への道ではなからうか。

中国山地の豊かな自然と文化に育まれたまち

# 広島県 安芸高田市



中国山地の豊かな自然と文化に育まれたまち

中国地方の中部、広島県の北部に位置する安芸高田市は、平成十六年三月に旧高田郡の六町(吉田町、八千代町、美土里町、高宮町、甲田町、向原町)が合併して誕生しました。約五百四十平方キロメートルある面積の八割が森林で占められ、中国山地の山々と豊かな自然に抱かれて約三万二千人が暮らしています。

市の北部を中心に、畜産・野菜・果樹・花・酒米づくりなどが展開されており、広島市と隣接する南部では商工業が盛んです。また戦国時代に中国地方統一を成し遂げた名将・毛利元就を生んだ地としても知られ、その生涯を過ごした安芸高田市には毛利氏ゆかりの史跡が数多く残されています。近隣には中国電力(株)の可部水力発電所(最大出力三万八千ワット)や新熊見水力発電所(最大出力二万三千ワット)があり、地域に電気を供給しています。

### 高田郡六町の合併を前に危機感が高まる

合併前の旧高田郡では、各町で人口の減少と少子化・高齢化が進行していました。産業においても長引く経済不況と地域間競争の激化で、農業・商工業とも全般に生産力が低下するなど、地域経済は停滞を続けていたのです。そのような中で、合併がさらに住民へ悪い影響を及ぼすのではないかと、地域全体に不安が広がっていました。

「とくに周辺地域では、合併でますます辺地」となってしまうのではないかと不安の声が高まっていました。このままでは、住民の声が行政に届かなくなってしまう。栄えたとしても中心部だけで、周辺部は取り残される…」と当時高宮町役場に勤務さ



1. 5月下旬から6月上旬にかけて、市内各地で開催される「はやし田」。お囃子にあわせて一斉に歌い、田植えをする。 2. 西日本でも有数の桜の名所である八千代湖畔(土師ダム) 3. 安芸高田市の伝統文化の一つ「神楽」。市内には約20の神楽団があり、安芸高田市の歴史と文化を支えている。

## 自治意識の高まりで地域力がアップする 住民と行政の「協働」でいきいき住みよいまちづくり

平成十六年三月に六町合併を控えていた安芸高田市では、圏域が拡大することにより住民の声が市政に届きにくくなるのではないかと不安が広がっていました。そういった不安を解消すべく、安芸高田市はさまざまな試みに取り組み始めました。今回は、住民の自治活動と行政の支援による「協働」で地域活性化を加速している、安芸高田市の取り組みをご紹介します。



川根振興協議会  
会長 辻駒 健二さん

「たえば農業でも、今後人口が減って高齢化していけば、農地を個人で守っていくには限界がある。小さな集落では守るのさえ難しい。集落を越えた区域での助け合いが必要だったので、合併の話がきっかけで各地域に危機感が生まれまして」と小田さん。地域で助け合っていくには、住民自らが地域のために活動する自治機能と、実情を行政に反映させる新しいシステムづくりが必要でした。そうした中、平成十四年に発足した「高田郡六町合併協議会」では、合併後も住民がいきいきと安心して暮らせるまちづくりをめざして検討が重ねられたのです。

**川根地区のさまざまな自治活動**

**■エコミュージアム川根**

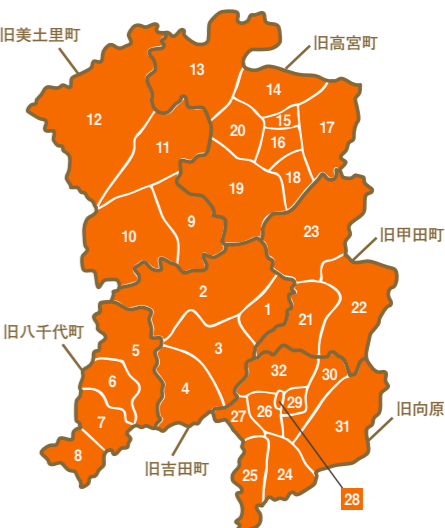
廃校になった川根中学校の跡地を利用し、平成四年に建てられた「エコミュージアム川根」は住民自治のシンボリックな存在です。川根の魅力をアピールする農村と都市の交流施設として、宿泊室・レス

**■ふれあいと助け合い活動**  
「お互いさま」の心を大切にしたい助け合いの活動も根付いています。「一人一日一円募金」もそのひと



安芸高田市役所 総務企画部 自治振興課  
課長 小田 忠さん

**安芸高田市地域振興組織区域図**



**三十二の地域振興会に区分組織づくりがスタート**

「高田郡六町合併協議会」がテーマとしたのは、住民と行政の対話を基礎とした「協働のまちづくり」の推進でした。行政は積極的に情報を開示し、住民の自治活動を支援する。住民は「自分たちの地域は自分たちの手で」という意識を持って活動を行う。この考えに基づいて、自治活動の各エリアを設定すべく、安芸高田市となる地域全体の新しい区割りを行いました。「行政が勝手に決めるのではなく、旧村や小学校区な

組織名	設立年	(世帯) 世帯数	(人) 人口
1 吉田地区振興会	昭和53年	2,128	5,144
2 丹比地区振興会	昭和53年	626	1,584
3 可愛地区振興会	昭和53年	1,391	3,194
4 郷野地区振興会	昭和53年	562	1,445
5 土師・勝田地域振興会	平成15年6月	340	770
6 佐々井地域振興会	平成15年4月	383	960
7 下根地域振興会	平成15年8月	402	1,081
8 上根・向山地域振興会	平成15年7月	416	1,099
9 横田振興会	平成14年3月	338	1,022
10 本郷地域づくり協議会	平成13年7月	332	936
11 北振興会	平成13年12月	260	765
12 生桑振興会	平成14年9月	257	678
13 川根振興協議会	昭和47年2月	264	608
14 下佐振興会	昭和54年4月	162	387
15 志部府親交会	昭和58年1月	46	115
16 上佐一心会	昭和58年1月	173	465
17 船木振興会	昭和56年7月	254	565
18 房後連絡協議会	昭和57年6月	112	275
19 東原地区コミュニティづくり連絡協議会	昭和53年7月	615	1,469
20 羽佐竹振興協議会	昭和57年12月	147	393
21 小原地域振興会	平成14年11月	644	1,661
22 小田東地域振興会	平成15年1月	764	2,058
23 甲立地域振興会	平成14年6月	728	1,981
24 保垣地区振興会	平成15年7月	147	321
25 有留自治振興会	平成16年2月	117	307
26 長田上地域振興会	平成16年2月	144	349
27 長田下地域自治振興会	平成16年2月	161	363
28 向井原地域振興会	平成15年12月	266	680
29 坂下地域振興会	平成16年3月	223	556
30 坂中地域振興会	平成15年12月	187	479
31 坂上地域振興会	平成15年12月	135	307
32 戸島地域振興会	平成16年2月	478	1,206

(安芸高田市市勢要覧より、世帯数・人口=平成19年4月1日現在住民基本台帳)

ど昔からあったコミュニティの区域をもとに住民の実情に合わせて三十二に区割りがされました。世帯数五十戸未満の区域から二千戸を超える区域まで、規模はいろいろになりましたが、まとまりや連帯意識は強い。それに地域の特色も表れる結果となりました」と小田さんは語ります。そして三十二の地域に、以前からあった各地域の自治組織を土台とした地域振興会を設置。さらに各組織の活動連携を図るため旧町単位に六つの連合組織を設置し、住民主導でのまちづくりが本格的に動き出したのです。

**住民自治の先進地・川根地区**

安芸高田市の最北にあり、島根との県境に位置する川根地区は、三十年以上も前から住民による自治活動の盛んなところ。この地区は、昭和四十七年の集中豪雨による大洪水で壊滅的な被害を受け

トラン・研修室・ホールなどを備え、すべて地元の人たちが管理運営。住民集会のほか、県内外からの住民自治組織の視察や大学生の合宿などにも利用され、毎年たくさんの方が訪れています。

**■お好み住宅**

子供がいる若者の定住を促進するために「お好み住宅」というユニークな取り組みを行っています。これは住む人のライフスタイルに合わせた間取りの市営住宅で、毎月三万円の賃貸で賃貸するというもの。入居条件は、地域活動への参加と義務教育修了前の子供がいることなどです。

お好み住宅には、すでに十六世帯七十三人が入居して根付いています。川根小学校に通う児童も増え、地元には後継者がいるという心強さを与えています。



エコミュージアム川根



お好み住宅から通う児童たち



毎週金曜日に行われるサテライト型デイサービス

つ。子供からお年寄りまでが毎日一円を募金するというのも、この募金を財源に一人暮らし高齢者の訪問活動を続けています。また、川根小学校の児童が月一回、七十歳以上の一人暮らしの高齢者に手紙を書く「まごころメール」や、児童とお年寄りが歌やゲームなどを楽しむ交流も行われており、お年寄りを元気づけるとともに、温かいつながりが子供たちを成長させています。お年寄りが気軽に寄れる「高齢者ふれあいサロン」も開設。週一回、ケアマネージャーや看護師等の専門職が川根まで出張し、高齢者にデイサービスを行う「サテライト型デイサービス」も行っています。農業においては、農地を維持管理していることが困難な人や集落のために「営農環境の助け合いで農地の荒廃を防いでいます。また河川や道路の清掃や、沿道に花を植えるなど、地域の環境や景観の保全にも取り組んでいます。

**「行政へ『要求』するのではなく『提案』する**

住民の自治意識が高く、「協働」のモデルとなった川根地区ですが、振興協議会ができた当初は住民と行政との関係

がうまくいっていませんでした。当時、川根地区が属する旧高宮町の町長(現・安芸高田市の児玉市長)は住民との対話をモットーにしており、振興協議会と役場職員との「地域振興懇談会」が盛んに開かれていました。しかしそれはまるで住民と行政との対決の場だったと、現在の川根振興協議会・会長の辻駒健二さんは回想します。

「住民側は自分たちの要求書を一方的に提出し、行政側はそれをできる・できないで返答する。お互いが主張し合うばかりで、懇談会が深夜にまで及ぶこともありました。



可愛地区振興会で取り組む福原城跡登山道整備

これではいくらか交渉しても良い方向に進みません。」  
住民が自分の利害でいくらか文句を言っても何ら得るところがない。そこで、ただ行政に要求するだけでなく、こんなことはできないかと提案する形をとるようになってから関係が変わっていったといいます。

「職員を怒るのではなく、いかに行政から有利な情報を引き出すかが肝心だと気付いたのです。何かを提案すると、行政の側も単にできないではなく代案を出してくる。住民も行政もお互いの立場に立つて考えるようになる。要求から提案へ移行してきたことで、発展的な議論ができるようになってきたような気がします」と辻駒さんは語ります。

### リーダーが率先して汗をかく

地区の防災・安全のための車によるパトロールを、辻駒さんは毎日欠かしません。また、農地の草むしりなどの細かな作業も率先して行っています。川根振興協議会の会長

ですが、話し出すと熱くなって十五分の持ち時間をほとんどオーバーしてしまいます。会場前に地域のノボリが立ったり、ロビーにパネル展示をしたりと、すごい盛り上がりです」と語るのは川根振興協議会の辻駒さん。  
「たとえば歴史的な建物や昔ながらの景観を守ったとか、子供の安全を見守る制度を作ったとか、高齢者福祉を充実させたなどの報告がありま

を務めて十五年になる辻駒さんですが、当初は住民が思うように動いてくれなかったと

「はじめから私の一声で動くというわけにはいきません。それでも自分が先頭に立って汗をかくことで、徐々にみんな

## 小さな自治システムが やがて大きな幸せを生み出す

### 行政は財政的・人的の両面から支援

平成十六年三月、安芸高田市が誕生して、住民と行政の協働による新しい取り組みがスタートしました。川根地区をモデルとして、他の三十一振興会もそれぞれの地域の状況に基づいた自治活動を展開。祭りやスポーツイベントの開催、高齢者ふれあい訪問、資源ゴミ回収、組織的な地域防災、歴史遺産の保全などの活動が各地で行われました。行政もそれに合わせて、財政的・人的な支援を行ってきました。市役所の小田さんはこう話

ながついできてくれるようになります。そして「おとう」と努力していたところが、住民から「させてくれ」という方向に変わってきた。やはりみんなが心を合わせてこそ「協働」ですね」と辻駒さんは笑顔で話してくれました。

ます。

「財政的支援として活動支援助成金をすべての地域振興会に均等に分配しますが、事業支援助成金はそれぞれの事業について交付しています。つまり、やる気のある地域を積極的に支援していこうということ」

人的支援では、地域活動への行政職員の参加が重要なポイントであるとのこと。

「職員もまた地域の一住民です。振興会の役員、学校のPTA活動、婦人会の運営、少年野球のコーチなど、できることを積極的にを行い、住民として自分の住む地域に関

わつていくことが大切。そして行政にはどんな制度があるかなどの情報を提供し、住民みんなが参加できるように仕掛けていくことです。深く関わることで職員は地域のことがよく見えてきて、自覚を持つようになりま

すし、住民の行政への信頼も生まれます。」  
職員のいない地域では、各支所の窓口の担当者がきめ細かく相談を受けて支援する仕組みになっています。

また、安芸高田市では、「地域から求められる職員像」などをテーマに、毎年職員研修を実施しています。さらに、地域振興推進員を設け、各組織の運営手法などを指導しています。

### 自治活動の大きな刺激になる「市民フォーラム」

行政の支援としては、対話

がしっかりとして、地域全体で動いているところはまだまだ多くないのが実情です。でも川根のまねをするだけでなく、その地域に合った方法を見つけながら活動を推進することが大切だと思います。」

また小田さんは、地域振興会が行政の下請け機関になつてはいけないと熱く語ります。

「協働のまちづくりは、まず住民自らが、地域のために自分でも何かができるんだ、というところに、気づくことからは始まります。行政に住民が参加するだけでは協働ではない。『自らの地域は自らの手で』とした住民の自主的な活動を行政が的確にサポートするのが理想の形です。行政は地域振興会が活動しやすい環境をしっかりとつくることですね。」

小さな自治、そして協働のまちづくりの原点は、思いやりと助け合い。現代社会では他者への無関心が進み、様々な問題が生まれています。安芸高田市の取り組みは、地域だけでなく日本中に光を投げかけているのかもしれない。



市民フォーラムの様子

## 電気のふるさと紀行

戦国時代、中国地方を統一した名将・毛利元就。この戦国の雄は、安芸国吉田郡の郡山城(現在の安芸高田市吉田町)に生まれしました。市内では元就の墓所をはじめ、毛利氏ゆかりの数々の史跡を見ることが出来ます。毛利元就といえば「矢は三本重なること」で折れにくくなる」と息子たちに協力の大切さを教えた「三矢の訓」の逸話が有名です。ちなみにこの逸話が、吉田町に練習グラウンドを持つJリーグ・サンフレッチェ広島ของทีม名の由来にもなっています。日本語の「サン・三」とイタリア語の「フレッツェ・矢」の複合語で「三本の矢」の意。  
住民と行政の「協働」は、まさにみんなが協力して力強く前進するという安芸高田のお家芸。「三矢の訓」は、四百年以上の時を経て現在も生き続けているのです。



三矢の訓を伝える「百万一心碑」

# ふるさと応援団・大分県 竹田市

## 竹田研究所

大分県竹田市は、九州のほぼ中央、大分県の南西部に位置し、南部を宮崎県、西部を熊本県に接しています。周囲をくじゅう連山、阿蘇外輪山、祖母山麓に囲まれ、市域の大部分を山林が占める中山間地域です。市内中心部には鎌倉時代からの古い歴史をもち、昭和十一年に国指定史跡となった岡城址があります。この岡城址は少年時代を同じで過ごした瀧廉太郎の作曲した「荒城の月」の舞台としても全国に知られ、竹田市の観光名所となっています。

しかしながら、訪れる観光客は、大型観光バスを使った団体ツアーが大半で、大型バスの駐車場がある「岡城」の見学が主たる観光メニューとなり、昔ながらの町割りや社寺、商店街を残す「城下町」は、観光資源として生かされていませんでした。さらに、城下町風情を残す中心市街地は市街地の外側を迂回する国道57号線沿いにできた大型店舗の出現によって活力を奪われ、市の大部分をしめる農村エリアにいたっては、まとまった観光客が訪れることなどなく、農業人口の減少と高齢化などの問題を抱えていました。

過疎化が市全体として問題視されている中、市は「人口が少なくなる中、市は「地域の活力が失われること」を大きな問題としてとらえ、「まず竹田市を訪れる交流人口を増やし、地域に活力を与えながら、その中から定住者を生んでいく」という大きな戦略

を掲げました。そこで竹田市では、その基となる「観光振興計画」を平成九年に策定したのです。

**竹田研究所の誕生**

竹田市では、「観光振興計画」を推進するにあたり、「ツーリズム」という言葉を掲げました。そこには、新たな収入源や雇用機会だけを求めるのではなく、同時に地域住民の生活の質の面からも元気にしたい、という思いが込められていたのです。

そして、その「ツーリズム」の実践部隊として平成十年に組織されたのが「竹田研究所」です。今後必要となってくるツーリズム資源の掘り起こしは、分野が多岐にわたるため、行政の縦割り組織では実行が難しく、他部課を横断的にまとめる橋渡し役、サポート役が必要不可欠とな

たからです。

「竹田研究所」は、設立当初市の助役を所長とし、商工観光課参事を事務局長、そして行政職員と市民を研究員として構成されました。現在は、左図の体制で、研究員は四つの委員会に所属し、足元にある資源を様々な視点からツーリズム資源として見直し、社会のニーズに対して、どのような方法で対応するか調査研究を重ね、様々な活動を支援しています。

**外部との連携にも注力**

竹田研究所はツーリズム資源の開発にあたって、地域住民の支援を行うだけでなく、外部との連携や情報発信にも力を入れました。

外部との連携については、国土交通省の地域づくりインターン制度や地域活性化アドバイザー派遣制度などの機会を生かして、若い学生たちや専門家の視点を積極的に吸収しました。特に、一定期間、首都圏の学生が地元滞在中に地域づくりの現場を体験するインターン制度では、インターン生の提案により、インターン生との共同イベントが生まれるといった成果もありました。

そのイベントは「農と食の博覧会」として毎年開催されるようになり、農産物を生み

### 6つのツーリズム推進地区

竹田市は、町並みを見直そうとしている城下町地区(1地区)や、ツーリズムへの取り組みが期待できる農村地区(5地区)の計6地区をツーリズムの推進地区として定めています。6つの地区が含まれている範囲は東西約10km、南北に約15kmと大変広いのですが、地理的には離れた城下町と農村とをあえて組み合わせることで、ツーリズムの内容に幅ができるほか、「農村で生産したものをまちで消費する」という地域の環境的な循環を生み出す効果などが期待されています。



「食と農の博覧会」で加工品が集まった「食と農の博覧会」

出す「農村」とその農産物を食品へ変える文化を持つ「城下町」というつながりを再認識するとともに、竹田市の郷土料理の発掘・保存に役立っています。

開くなどの取り組みも行っていきます。

### ツーリズム推進の弾みとなった「竹楽」

イベントは一週間にわたって城下町と農村を舞台として展覧会、講演会、農業体験、まちなかでの田楽ツアーなどさまざまな催しが行われます。また、情報発信についても、積極的に各メディアへ広報誌やイベント案内を送付している他、定期的に福岡市へ出向いてマスコミ向けにPR会を

そんな中、観光協会が主催となり、平成十二年十一月、岡城址一体を三千本の竹灯籠が照らす「竹楽」が実施されました。

「竹楽」は里山の保全を第一に企画されたイベントです。山に手入れされず放置されている竹は、地下茎が杉やヒノキなどの人工林や棚田を侵

食するため、このままでは竹田市の美しい景観までもが崩れてしまう恐れがありました。この「厄介者」を「ツーリズム資源」に変えてしまおう一石二鳥の取り組みとして、伐採した竹で作った灯籠を名所旧跡の残る城下町に飾ることにしました。さらに使用した竹は工芸品にしたり、竹炭を作って川を浄化し、再び里山に返すというものです。この間、たくさんの方の市民ボランティアが関わっていますが、その数は回を重ねる毎に増え、竹灯籠の規模も三千本が今では二万本に増えました。また、毎年十一月の三日間の会期中には、城下町一体でコンサート等さまざまなイベントも開催されており、十万人を超える観光客が訪れ、経済効果は一億円を超すと言われています。

多くの人の手によって実現し、今や竹田市の看板行事に成長した「竹楽」を通して、市民の中で「ツーリズム活動」が確実に盛り上がってきたのです。



夕刻、梵鐘の合図に合わせて点火される竹灯籠。

### ツーリズム協会設立へ

市内の各地域団体・組織ではツーリズムの意識が芽生えるようになり、各々が、気が付くと、各地域のツーリズムが各々に進められている状態になっていました。

例えば、様々な団体が別々に作成して情報が分散してしまっているまちなかの案内図や農村地区のまとまったツーリズム情報の不在、滞在中に複数の体験プログラムを組み合わせた場合の問い合わせ先のないなど具体的な問題でした。「ツーリズム資源」と

来訪者をつなげる新たな組織として、「竹田ツーリズム協会」を設立すべく、竹田研究所や商工観光課、観光協会などが中心となり、奔走しました。そして、平成十八年三月、「竹田市観光ツーリズム協会」が発足しました。各地域の特色ある各種体験交流メニューや地域特徴をまとめたり、情報の一元化や体制、質、価格の維持など、全体の質の向上を目指しています。また、今年度は雇用創設・起業化に向けての事業を推進するなど、「竹田を愛する人が竹田に住み続ける」取り組みへと発展しています。

DATA 竹田研究所  
竹田市大字々々2250番地1  
TEL 0974-003105805  
http://www1.ocn.ne.jp/~takken/

「電気のふるさと」電源地域ニュース」では、電源地域のさまざまな取り組みを紹介しています。このコーナーでは、読者の皆様から寄せいただいたご意見・ご要望を積極的に誌面に反映させて参りますので、皆様の地域で取り組んでおられる事業や施策を「電気のふるさと」編集室までどしどしお寄せください。巻末にごさいますハガキを「活用ください。編集室一同心よりお待ちしております。」

宮城

サンマ獲る人、食べる人。  
町を挙げてのサンマの祭典「おながわ秋刀魚収穫祭」  
宮城県 女川町

「海と緑と魚のまち、明日のエネルギーを担う町」女川町は、宮城県の東端、牡鹿半島の基部に位置しています。

女川湾は、水深が深く、波静かな天与の良港として全国に知られ、世界三大漁場の一つとして名高い「金華山沖」を控え、古くから水産、観光の町として発展を続けてきました。

本町の水産業の核となる女川町地方卸売市場（魚市場）は、平成18年の全国主要港水揚高ランキングの第13位（数量約8万7千トン、水揚げ金額は、約75億円で全国第22位）と全国屈指の水揚げ港となっており、春には、アミヤコオナゴ、メロード（イカナゴの別称）等に始まり、沿岸域の低層水温が高くなるにつれてアイナメヤカレイ、メバル等の磯魚に加え、養殖ギンザケやカツオなどの暖水系の回遊魚も顔を揃えます。秋から冬にかけては、サンマなどのほか、冷水系のタラ、サケなどが水揚げされてきます。

ギンザケとサンマは、本魚市場の水揚げ二大魚種で、どちらも水揚げ金額では20億円（平成18年／ギンザケ19億5千万円、サンマ19億3千万円）に迫り、実に女川魚市場全体の50%を占めています。生産高



行列をつくるサンマの串焼きコーナー

お問い合わせ先  
女川町 企画課  
TEL 0225-54-3131

日本一のギンザケとともに、魚市場水揚げの中核を担うサンマは、平成18年、本州第1位の栄誉に輝きました。

その全国に知られる女川のサンマの豊漁祈願と消費者の皆さんへの感謝を込めて、毎年秋に魚市場周辺を会場に開催されるのが「おながわ秋刀魚収穫祭（女川魚市場買受人協同組合主催）」です。今年も、10月7日に記念すべき第10回目が開催され、全国から来場される皆さんに、女川のサンマを思う存分楽しんでもらおうと、新鮮なサンマ約30トンを用意。無料で振る舞われるサンマの炭火焼や、串焼きコーナーには長蛇の列ができていました。その他、恒例となったサンマの格安販売やサンマのつかみ取りなども行われ、「サンマ尽くし」に浸れます。また、特設ステージでは、地元小中学校の児童生徒による踊りや女川潮騒太鼓が披露されたほか、地元バンドが秋刀魚収穫祭のために制作したテーマソング「サンマDEサンバ」などが演奏され、軽快なサンバのリズムが会場いっぱいに広がりました。心地よいリズムに合わせ地元の小中学生が踊りだすと、思わず飛び入り参加する人も。サンマを焼き上げる香ばしい匂いと、祭り好きな「女川人」の心意気を一日中堪能できるお祭りです。

女川町では、この秋刀魚収穫祭のほか、春にはギンザケをテーマにしたイベントが「マリンパル女川」を会場に、また、夏には、女川港をメインに繰り広げられる「女川みなと祭り」など、1年を通して様々な楽しいイベントが盛りだくさん。どうぞ皆さんも「海と緑と魚のまち、明日のエネルギーを担う町」女川町の旬な祭りにお出かけください。心からお待ちしております。

青森

大間超マグロ祭り  
青森県 大間町

青森県下北半島の最北部、本州最北端に位置する大間町。目の前には津軽海峡が広がり、雄大な北海道の山々の景色が一望できます。また、マグロの一本釣りで知られ、今では、「マグロ」と言えば大間、「大間」と言えばマグロ、として有名になっています。



たくさんの観光客の前にマグロ解体ショー

平成12年にNHK朝の連続ドラマ小説「私の青空」の舞台となりマグロの一本釣りが脚光を浴びました。その年に大間町商工会は、町のキーマンを集めて「大間の観光ビジョン」の策定を行います。そのまま事業としては一旦終了してしまいます。しかし、策定に関わったメンバーの中から、「ビジョンを行動に移さなければ意味がない」との声が上がり、有志が集まり「大間活性化委員会（通称・やるど会）」が結成されました。

実は大間町では、10月の下旬に2日間ほど、太平洋から朝日が昇り、日本海に夕日が沈む日がありますが、この風景が見られる場所は、全国でも数カ所しかありません。この珍しい風景と旬の大間マグロを活用し、「やるど会」は平成13年に第1回「大間超マグロ祭り」を開催しました。イベントではなく、「集客キャンペーン」とし、補助金等に頼らず、自分たちの力で次の試みにつ

なげていくことを目標としており、今年では、秋の一大イベントとして、例年1万人以上が大間町を訪れています。

第1回目に開催したマグロ祭りは実験的なもので、マグロ解体ショーは行いましたが、即売会がありませんでした。ところが観光客のニーズは「大間

マグロ」を買いたい、食べたいということで、観光客からは「やるど会」でなく、「やねど会」「やらないど会」と皮肉を言われたそうです。そして、2回目からは、1回目

の失敗を生かし、マグロの即売会を行い、今では年々イベントとしての知名度が上がり、観光客も増加しています。しかしながら、マグロの確保、イベント場所、駐車場スペース、人員の確保など問題も発生してきています。今後、イベントとして続けるためには、これだけの観光客を受け入れる体制の整備が急務となっています。

7回目となる今年の「大間超マグロ祭り」は、10月20日と21日の2日間開催され、マグロの解体ショー&即売会、マグロ漁ウォッチング、海鮮バーベキュー、特産品即売会などを行い、来場者の楽しむ姿が多く見られました。運がよければ、「マグロの水揚げ」のシーンも見られますので、皆さんも「マグロの町おおま」を訪れ、ぜひ「大間マグロ」を味わってみてはいかがでしょうか。

お問い合わせ先  
大間町活性化委員会(通称:やるど会)  
事務局:大間町商工会  
TEL 0175-37-2233

いきいき電源地域

地域振興に取り組んでいる  
電源地域の元気な姿を紹介します

# 「原子力発電所見学会」を実施しました

経済産業省資源エネルギー庁の委託を受け、原子力発電の必要性や安全性、立地地域の実状に対する認知向上や理解促進を図る「原子力発電所見学会」を全国で実施しております。年度内に十回実施することとしており、八月には九州電力(株)玄海原子力発電所、日本原子力発電(株)東海第二発電所、中部電力(株)浜岡原子力発電所、関西電力(株)大飯発電所の見学会を実施しました。それぞれ電力消費地である福岡市、千葉市、静岡市、大阪市などから教職員や高校生、自治体職員など計二二〇人に参加いただきました。



8月21日 九州電力(株)玄海原子力発電所・意見交換会風景



8月29日 関西電力(株)大飯発電所・訓練センター



8月27日 中部電力(株)浜岡原子力発電所・バス車中にて講義風景



11月17日 東北電力(株)女川原子力発電所・PR館

また、十一月には、東北電力(株)女川原子力発電所、日本原子力発電(株)東海第二発電所、東京電力(株)柏崎刈羽原子力発電所の見学会を実施し、それぞれ仙台市、東京都下、さいたま市などから計二一〇人に参加いただきました。当日は現地向かうバスの中で、「原子力発電のしくみ」や「世界のエネルギー情勢」などについて、専門家が講義を行い、まず参加者に基礎知識を習得していただきました。

発電所では、構内をバスで一巡、PR館及び訓練設備等を見学した後、発電所の職員や地元自治体職員との意見交換会を実施しました。参加者からは「百聞は一見にしか

■お問い合わせ先■  
(財)電源地域振興センター 普及啓発課  
電話：03・5405・8128  
e-mail: fukyuu@dengen.or.jp #k17  
ず。現場の声を聞いたのがありがたかった。「原子力発電所はマイナスのイメージでメディアには取り上げられているが、実際に自分の目で確かめることができ良かった」といった声が聞かれました。



11月24日 東京電力(株)柏崎刈羽原子力発電所・サービスホール(PR館)



11月18日 日本原子力発電(株)東海第二発電所・東海テラパーク(PR館)

# 「エネルギープラザ2007」を開催しました

平成十九年十一月一日(木)から二日(金)の二日間、東京都目黒区の「こまばエミナース」において経済産業省資源エネルギー庁の委託を受け、「エネルギープラザ2007」を開催しました。初日の開会式・基調講演パネルディスカッションには約三七〇名が集い、はじめに主催者を代表して中野正志経済産業副大臣より、続いて来賓の河瀬一治全国原子力発電所所在市町村協議会会長・敦賀市長よりごあいさつをいただきました。

その後、法政大学現代福祉学部長



法政大学現代福祉学部長 岡崎昌之教授

の岡崎昌之教授が「電源地域における再生と協働」のしくみづくり、地域産業の再生に向けて」と題して基調講演を行いました。岡崎教授はまず、具体的な事例と数字をもとに「過疎に悩む日本列島」を示したうえで、

今までの地域づくりは基盤整備が中心であったことを指摘しました。そして、これからはハードにソフトをプラスして、ソフトで地域再生の課題を解決していくことが必要と、栃木県茂木町の事例を紹介しながら訴えました。

また住民と行政がどのように協働を実現していくかについて、地域の課題は住民側の知恵を取り入れないと解決

できない時代になっており、お互いの理解を深め、行政側の「知識」や「財」と住民側の「知恵」を結集して、持続的な政策を立案していくことが必要であると述べました。また、愛媛県内子町の事例を挙げて、地域そのものをブランド化して都市の個性と農村の個性が対等に交流していくことの必要性を訴えました。最後に、これからは自己実現の志向性が強い団塊ジュニアの世代が農山村地域に移住して、こうした外来型の定住者が従来型の地域の人々と地域づくりを行っていく時代になりつつあると結びました。

続いてパネルディスカッションでは、モデレーターの岡崎教授をはじめ、高知県・松崎地域計画本舗の松崎了三氏、熊本県人吉市・ひまわり亭オーナーの本田節氏、岩手県遠野市・NPO法人「遠野山・里・暮らしネットワーク」副会長の菊池新一氏により活発な議論が行われました。

二日目は、地域振興事業検討会として、電源地域における今日的課題に対応した「体験交流事業検討会」「広域

■お問い合わせ先■  
(財)電源地域振興センター 普及啓発課  
電話：03・5405・8128  
e-mail: enepla@dengen.or.jp #k17

観光検討会」「漁業振興検討会」「特産品開発検討会」「交流事業開発検討会」「循環型地域づくり検討会」の六検討会を実施しました。主に午前中は検討会講師の基調講演や事例発表が、午後はグループに分かれてワークショップが行われました。

今回のエネルギープラザでは、「地域振興へのモチベーションの向上」と「課題克服に向けた実践的手法の獲得」に目標が置かれましたが、各会場では講師からの事前質問をもとに、課題克服のノウハウについて活発な意見交換や情報交換が行われ、盛況のうちにその幕を閉じました。



特産品開発検討会



全国原子力発電所所在市町村協議会会長 河瀬一治氏 (左) と 経済産業副大臣 中野正志氏 (右)

# 「エネルギー人形劇」を上演しました

経済産業省資源エネルギー庁の委託を受け、エネルギー人形劇を上演しています。

この事業は、原子力発電施設等の新規立地・増設予定地域、プルサーマル計画の実施が見込まれる立地地域及び既設立地地域の次世代を担う子供達が、将来、エネルギー・原子力、環境問題等について適切な判断・行動ができるように、エネルギー・原子力、環境問題等への関心を喚起し、正しい知識の普及啓発と理解促進を目的とするもので、全国八カ所です計十六回上演することとしております。

十月には、青森県むつ市「消費生活展」、福島県高浜町「親子ふれあい広場」及び愛媛県伊方町「町民文化祭」にて上演し、合計四三二名の方にご覧いただきました。

十一月には、福島県大熊町「ふるさとまつり」、静岡県御前崎市「産業まつり」及び北海道泊村立泊小学校にて上演し、合計六五五名の方にご覧いただきました。



むつ市「消費生活展」にて、上演風景

「エネルギー人形劇」のお問い合わせ先  
(財)電源地域振興センター 普及啓発課  
電話：03-5405-8128  
e-mail: fukyuu@dengen.or.jp

# 「でんきのふるさと新潟げんきフェスタ in ぐはんミュージアム」を開催しました

東京電力(株)の委託を受け、十一月二十一日(水)～二十二日(木)、三十日(金)～十二月一日(土)の四日間、「でんきのふるさと新潟げんきフェスタ in ぐはんミュージアム」を開催しました。

平成十九年七月十六日に発生した新潟県中越沖地震で未曾有の打撃を受けた新潟県について、現在の震災復興に向けた元気な姿を「特産品・伝統文化・観光」を通じてお知らせするとともに、被災した柏崎刈羽原子力発電所の正確な情報発信を通じて地域の安全性をアピールし、「電気のふるさとである新潟」と



物産展ブースにて



ステージにて、新潟の名物女将による観光案内クイズ

「電気の消費地である首都圏」の交流をさらに深めていただくことを目的としたものです。  
東京・有楽町の東京国際フォーラム内にある「ぐはんミュージアム」で実施し、新潟の酒をはじめとする物産展や最新の観光情報、新潟コシヒカリの「つかみどり大会」、新潟の家庭料理「のっぺ汁のふるまい」など盛りだくさんでした。また、ステージでは、新潟の食材を使った料理教室や、新潟の名物女将による観光案内クイズなどを行い、約一万五千人の来場者の方々に楽しんでいただきました。

## Vol.8・9 読者の声から

●どこの地域も、自分たちの町の特色を生かそうと頑張っている様子が誌面から伝わってきました。何か一つにターゲットをしぼることが大切だと思いました。  
(宮城県東松島市 女性)

●首都圏の電気をまかなっている地域の産品を紹介することは、意義のあることだと思います。  
(福島県福島市 女性)

●本誌の記事は、力を合わせれば何でも出来るシリーズですね。小さな力も合わされば、大きな力になるんだと私にパワーを与えてくれました。

私にも何か出来るはず・・・。

(宮崎県延岡市 女性)

●福井県越前町では、これからの季節、カニや水仙の観光客でにぎわいます。越前ガニや甘エビ、カレイなどの新鮮な海産物が豊富で、また、運が良ければ「波の華」を見ることができ

ます。「波の華」とは、厳寒期海岸に打ち寄せる波が白い泡状になり、この泡が強風により舞い上がる様子が花びらが宙に舞っているように見えることからそう呼ばれています。  
(福井県越前町 女性)

●私の住んでいる青森県黒石市では、今「焼きそば」を地域活性化につなげる

動きが起きています。市内五十七箇所の焼きそば取扱店を掲載した「焼きそばマップ」が商工会議所から発行されました。黒石名物の「つゆ焼きそば」などがマスコミで取り上げられています。  
【黒石商工会議所: <http://www.k-ci.or.jp>】  
(青森県黒石市 女性)

## 【読者プレゼント】

今号の特集「Pick Up」にご登場いただきました広島県安芸高田市のご厚意により、川根柚子振興協議会「柚子しずく(柚子ジュース)一八〇リットル六本入り」を五名様にプレゼントいたします。

とじ込みのアンケートハガキに本紙へのご意見、ご感想などをご記入の上、平成二十年一月二十日(消印有効)までにお送



りください。なお、当選の発表は発送をもって代えさせていただきます。

## 【お知らせ】

「電気のふるさと」じまん市産品ネットショップは、九月末をもって残念ながら閉店となりました。今までのご愛顧ありがとうございました。

## 【編集後記】

特集の取材で安芸高田市を訪問した際、「エコミュージアム川根」に宿泊させていただきました。夕食は地元の主婦の方々が工夫を凝らした郷土料理。見事な鮎の塩焼きに感動！しました。都会の喧騒から離れ、豊かな山々を眺めるうちに自然と開放されていく心。「電気のふるさと」ならぬ「心のふるさと」がそこにはありました。(M)



## 人事往来

### ●電源立地都道府県知事(平成19年8月～10月選挙分)

都道府県名	氏名	当選月日
埼玉	上田 清司	8月26日

### ●電源地域市町村首長(平成19年8月～10月選挙分)

市町村名	氏名	当選月日
甲佐町(熊本)	奥名 克美	8月19日
中富良野町(北海道)	四方 昌夫	8月21日
鮫川村(福島)	大樂 勝弘	8月21日
盛岡市(岩手)	谷藤 裕明	8月26日
天栄村(福島)	兼子 司	8月28日
女川町(宮城)	安住 宣孝	9月4日
大熊町(福島)	渡辺 利綱	9月4日
都農町(宮崎)	河野 正和	9月9日
関市(岐阜)	尾藤 義昭	9月16日
三島町(福島)	齋藤 茂樹	9月26日
岩内町(北海道)	上岡 雄司	9月30日
上関町(山口)	柏原 重海	9月30日
平内町(青森)	逢坂 雄一	10月17日
野辺地町(青森)	亀田 道隆	10月14日
廿日市市(広島)	眞野 勝弘	10月21日
中津市(大分)	新貝 正勝	10月14日
五木村(熊本)	和田 拓也	10月21日
袖ヶ浦市(千葉)	山口 清	10月28日



## ■ 産品自慢 —— Vol.10 富山県 立山町

### かんもち紙風船

富山県の中央部から南東に細長く位置する立山町。年間約150万人もの観光客で賑わう「立山黒部アルペンルート」や、剣岳など3000m級の山々が連なる北アルプス立山連峰など、世界的スケールの観光スポットが四季折々に楽しめます。

今回ご紹介するのは、町の「食」「かあちゃんの味」を伝えていこうと農村の女性たちが立ち上げた農業組合法人「食彩工房たてやま」がつくる「かんもち紙風船」です。

「かんもち紙風船」は、「富山県＝売薬さん」のイメージから遊び心のある新たな特産品を生みだそうと、町や富山農業改良普及センターの支援を受けて企画されました。これは、自然乾燥させた手作り寒もちを、一辺が9センチの立方体の紙風船の中に入れた商品で、紙風船の各面には立山連峰や寒もち乾燥風景の写真、県の地図などが描かれています。その紙風船の中に小さな寒もちを入れ、しばらく状態で電子レンジにかけると寒もちとともに紙風船が膨らみます。その紙風船を開くと、大きく膨れた寒もちが食べごろになっているというわけです。企画段階では紙風船がうまく膨らまず、試行錯誤を重ねたそうです。



かんもち紙風船

手作り寒もちは「ほんもの、無添加」にこだわっています。立山連峰の雪どけ水で育まれた新大正もち米100%を主原料に、杵でつき、つきたての餅を木型に入れて2～3日ねかせ、硬くなった餅を4mm程度にカットし、1月上旬から2月上旬頃（寒中時）立山山麓から吹きおろす寒風で、自然乾燥させたものです。干しあがり均一になるように、一つひとつ手作業で編み上げていきます。

平成16年度には、第3回日本おみやげアカデミー賞にてアイデア賞を受賞し、平成18年度には、富山県優良観光土産品推奨制度菓子部門にて富山県知事賞を受賞しました。

「かんもち紙風船」が3個とおまけに紙風船が1枚入って420円（税込）です。保存食ですので、1年中お買い求めいただけます。遊び心たっぷりの紙風船と寒もちはお土

産としても大変好評をいただいています。ご家族やご友人、恋人とお楽しみください。その他、『食彩工房たてやま』では、かあちゃんたちがこだわってつくる立山権現寒もち・立山雷鳥漬・のし餅・古代米大福等人気商品がたくさんあります。



色とりどりの寒もちは、ビート(赤かぶ)・黒豆・くちなし・ごま・しそ・黒砂糖・ヨモギ・昆布のり・コーヒー・古代米・えびの天然色素12種類(^^)

お問い合わせ先  
(農)食彩工房たてやま  
TEL 076-463-5700